

火星の運河

江戸川乱歩

青空文庫

又あすこへ来たなという、寒い様な魅力が私を戦かせた。おののにぶ色の暗やみが私の全世界を覆いつくしていた。恐らくは音も匂においも、触覚さえもが私の身体からだから蒸発して了しまつて、煉羊羹ねりようかんの濃こまやかに澱よどんだ色彩ばかりが、私のまわりを包んでいた。

頭の上には夕立雲の様に、まっくらに層をなした木の葉が、音もなく鎮しずまり返かへつて、そこからは巨大な黒くろ褐かつ色しよくの樹幹が、滝をなして地上に降り注ぎ、観兵式の兵列の様に、目も遙はるかに四方にうち続いて、末は奥知れぬ暗の中に消えていた。

幾層の木の葉の暗のその上には、どの様なうらかな日が照っているか、或あるいは、どの様な冷い風が吹きすさんでいるか、私には

少しも分らなかつた。ただ分つてゐることは、私が今、果てしも知らぬ大森林の下闇を、行方定めず歩き続けている、その单调な事実だけであつた。歩いてても歩いてても、幾抱えの大木の幹を、次から次へと、迎え見送るばかりで景色は少しも変らなかつた。足の下には、この森が出来て以来、幾百年の落葉が、湿氣の充ちたクツシオンを為して、歩くたびに、ジクジクと、音を立ててゐるに相違なかつた。

聴覚のない薄暗の世界は、この世からあらゆる生物が死滅したことを感じさせた。或は又、不気味にも、森全体がめしいたる魑魅魍魎に充ち満ちているが如くにも、思われなかつた。くちなわの様な山蛭が、まつくらな天井から、雨垂れを為して、

私の襟えりくびに注いでいるのが想像された。私の眼界には一物の動くものとしてなかったけれど、背後には、くらげの如きあやしの生きものが、ウヨウヨと身をすり合せて、声なき笑いを合唱しているのかも知れなかった。

でも、暗闇と、暗闇の中に住むものが、私を怖こわがらせたのは云うまでもないけれど、それらにもまして、いつもながらこの森の無限が、奥底の知れぬ恐怖を以もつて、私に迫った。それは、生れ出たばかりの嬰兒えいじが、広々とした空間に畏怖いふして、手足をちぢめ、恐れ戦くが如き感じであった。

私は「母さん、怖いよう」と、叫びそうになるのを、やっとこらえながら、一刻も早く、暗の世界を逃れ出そうと、あがいた。

併し、あがけばあがく程、森の下闇は、益々暗さをまして行つた。何年の間、或は何十年の間、私はそこを歩き続けたことであらう！ そこには時というものがなかった。日暮れも夜明けもなかった。歩き始めたのが昨日であつたか、何十年の昔であつたか、それさえ曖昧な感じであつた。

私は、ふと未来永劫この森の中に、大きな大きな円を描いて歩きつづけているのではないかと疑い始めた。外界の何物よりも私自身の歩幅の不確実が恐しかった。私は嘗つて、右足と左足の歩きぐせにたった一寸の相違があつた為に、沙漠の中を円を描いて歩き続けた旅人の話を聞いていた。沙漠には雲がはれて、日も出よう、星もまたたこう。併し、暗闇の森の中には、いつまで

待つても、何の目印も現れては呉れないのだ。世にためしなき恐れであつた。私はその時の、心の髓すいからの戦すきを、何と形容すればよいのであろう。

私は生れてから、この同じ恐れを、幾度いくたびと知れず味あじわつた。併し、一度たびごとに、いい知れぬ恐怖の念は、そして、それに伴うあるとしもなき懐なつかしきは、共に増しこそすれ、決して減じはしなかつた。その様に度々のことながら、どの場合にも、不思議なことには、いつでもどこから森に入つて、いつ又どこから森を抜け出すことが出来たのやら、少しも記憶していなかつた。一度ずつ、全く新たななる恐怖が私の魂を押し縮めた。

巨大なる死の薄暗を、豆つぶの様な私という人間が、息を切り

汗を流して、いつまでも、いつまでも歩いていった。

ふと気がつくくと、私の周囲には異様な薄^{うす}明^{あかり}が漂い初めていた。それは例え、幕に映った幻燈の光の様に、この世の外^{ほか}の明るさではあつたけれど、でも、歩くに随^{したが}つて闇はしりえに退いて行つた。「ナンダ、これが森の出口だったのか」私はそれをどうして忘れていたのであろう。そして、まるで永久にそこにとじ込められた人の様に、おじ恐れていたのであらう。

私は水中を駈けるに似た抵抗を感じながら、でも次第に光りの方へ近づいて行つた。近づくに従つて、森の切れ目が現れ、懐しき大空が見え初^{はじ}めた。併し、あの空の色は、あれが私達の空であ

つたのだろうか。そして、その向うに見えるものは（？）アア、私はやっぱりまだ森を出ることが出来ないのだった。

森の果てとばかり思い込んでいた所は、その実森の真中であつたのだ。

そこには、直径一町ばかりの丸い沼があつた。沼のまわりは、少しの余地も残さず、直ちに森が囲んでいた。そのどちらの方角を見渡しても、末はあやめも知れぬ闇となり、今迄私の歩いて来たのより浅い森はない様に見えた。

度々森をさ迷いながら、私は斯様な沼のあることを少しも知らなかつた。それ故、パツと森を出離れて、沼の岸に立った時、この景色の美しさに、私はめまいを感じた。万花鏡を一転して、

ふと幻怪な花を発見した感じである。併し、そこには万花鏡の様な華かな色彩がある訳ではなく、空も森も水も、空はこの世のものならぬいぶし銀、森は黒ずんだ緑と茶、そして水は、それらの単調な色どりを映しているに過ぎないのだ。それにも拘らず、この美しさは何物の業である。銀鼠の空の色か、巨大な蜘蛛が今獲ものをめがけて飛びかかろうとしている様な、奇怪なる樹木達の枝ぶりか、固体の様におし黙って、無限の底に空を映した沼の景色か、それもそうだ。併しもつと外にある。えたいの知れぬものがある。

音もなく、匂いもなく、肌触りさえない世界の故か。そして、それらの聴覚、嗅覚、触覚が、たった一つの視覚に集められてい

る為^{ため}か、それもそうだ。併しもつと外にある。空も森も水も、何者かを待ち望んで、ハチ切れ相^{そう}に見えるではないか。彼等の貪^{どんら}婪^ん極りなき慾情が、いぶきとなつてふき出しているのではないか。併しそれが、何故^{なぜ}なればかくも私の心をそそのめるのか。

私は何気なく、眼を外界から私自身の、いぶかしくも裸の身体^{からだ}に移した。そして、そこに、男のではなくて、豊満なる乙女^{おとめ}の肉体を見出した時、私が男であったことをうち忘れて、さも当然の様^{よう}にほほえんだ。ああこの肉体だ（！）私は余りの嬉しさに、心臓^{のど}が喉^{のど}の辺まで飛び上るのを感じた。

私の肉体は、（それは不思議にも私の恋人のそれと、そっくり生^{いき}うつしなのだが）何とまあすばらしい美しさであつたらう。ぬ

れ鬢かつらの如く、豊ゆたかにたくましき黒髪、アラビヤ馬もつに似て、精悍せいかんにはり切った五体、蛇の腹の様につやややかに、青白き皮膚の色、この肉体を以て、私は幾人の男子を征服して来たか。私という女王の前に、彼等がどの様な有様でひれ俯ふしたか。

今こそ、何もかも明白よになった。私は不思議な沼の美しさを、漸ようく悟ることが出来たのだ。

「才、お前達はどんなに私を待ちこがれていたことであろう。幾千年、幾万年、お前たち、空も森も水も、ただこの一刹いっせつ那の為に生き永らえていたのではないか。お待ち遠さま（！）さあ、今、私はお前達の烈はげしい願ねがいかなえて上げるのだよ」

この景色の美しさは、それ自身完全なものではなかった。何か

の背景としてそうであつたのだ。そして今、この私が、世にもすばらしい俳優として彼等の前に現れたのだ。

闇の森に囲まれた底なし沼の、深く濃こまやかな灰色の世界に、私の雪せつぱく白はだえの肌はだえが、如何いかに調和よく、如何に輝かしく見えたことであろう。何という大芝居だ。何という奥底知れぬ美しさだ。

私は一步沼の中に足を踏み入れた。そして、黒い水の中央に、同じ黒さで浮んでいる、一つの岩をめぐがけて、静しずかに泳ぎ初めた。水は冷たくも暖かくもなかった。油の様にトロリとして、手と足を動かすにつれてその部分丈だけ波立つけれど、音もしなければ、抵抗も感じない。私は胸のあたりに、二筋三筋の静な波紋はもんを描いて、丁度真白な水鳥が、風なき水面をすべる様に、音もなく進ん

で行った。やがて、中心に達すると、黒くヌルヌルした岩の上に這はい上あがる。その様さまは、例えたとえば夕ゆう風なぎの海うみに踊よる人魚にぎの様ようにも見えただであらうか。

今、私はその岩の上にスツクと立上った。オオ、何という美しさだ。私は顔を空そらぎまにして、あらん限りの肺臓はいぞうの力を以て、花火はなびの様ような一ひと声こゑを上げた。胸むねと喉のどの筋肉きんじくが無む限げんの様ように伸のびて、一点いっのてん様ようにちぢんだ。

それから、極端な筋肉の運動が始められた。それがまあ、どんなにすばらしいものであつたか。青あお大だい将しょうが真ま二につつにちぎられてのたうち廻まわるのだ。尺しゃく取とり虫むしと芋虫いもむしとみみずの断だん末まつ魔まだ。無限の快樂に、或は無限の痛苦にもがくけだものだ。

踊り疲れると、私は喉をうるおす為に、黒い水中に飛び込んだ。そして、胃の腑ふの受け容いれるだけ、水銀の様に重い水を飲んだ。

そうして踊り狂いながらも、私は何か物足らなかつた。私ばかりでなく周囲の背景達も、不思議に緊張をゆるめなかつた。彼等はこの上に、まだ何事を待ち望んでいるのであろう。

「そうだ、くれない紅のいろいろだ」

私はハットそこに気がついた。このすばらしい画面には、たった一つ、紅の色が欠けている。若もしそれを得ることが出来たならば、蛇の目が生きるのだ。奥底知れぬ灰色と、光り輝く雪の肌と、そして紅の一点、そこで、何物にもまして美しい蛇の目が生きるのだ。

したが、私はどこにその絵の具を求めよう。この森の果てから果てを探したとて、一輪の椿つばきさえ咲いてはいないのだ。立並ぶ彼の蜘蛛の木の外ほかに木はないのだ。

「待ち給たまえ、それ、そこに、すばらしい絵の具があるではないか。心臓というシボリ出し、こんな鮮かな紅を、どこの絵の具屋が売っている」

私は薄く鋭い爪を以て、全身に、縦横無尽のかき傷を拵こしらえた、豊なる乳房、ふくよかな腹部、肉つきのよい肩、はり切った太ふとも股も、そして美しい顔にさえも。傷口からしたたる血のりが川を為して、私の身体は真赤なほりものに覆われた。血潮の網シャツを着た様だ。

それが沼の水面に映っている。火星の運河（！）私の身体は丁度あの気味悪い火星の運河だ。そこには水の代りに赤い血のりが流れている。

そして、私は又狂暴なる舞踊を初めた。キリキリ廻れば、紅白だんだら染めの独楽だ。こまのたうち廻れば、今度こそ断末魔の長ながむ虫だ。しある時は胸と足をうしろに引いて、極度に腰を張り、ムクムクと上つて来る太股の筋肉のかたまりを、出来る限り上の方へ引きつけて見たり、ある時は岩の上に仰臥ぎようがして、肩と足とで弓の様にそり返り、尺取虫が這はう様に、その辺を歩き廻ったり、ある時は、股ももをひろげその間に首をはさんで、芋虫の様にゴロゴロと転って見たり、又は切られたみみずをまねて、岩の上をピン

ピンとはね廻って、腕と云わず肩と云わず、腹と云わず腰と云わず、所きらわず、力を入れたり抜いたりして、私はありとあらゆる曲線表情を演じた。命の限り、このすばらしい大芝居おおの、はれの役目を勤めたのだ。……………

「あなた、あなた、あなた」

遠くの方で誰かが呼んでいる。その声が一こと毎ごとに近くなる。地震の様に身体がゆれる。

「あなた。何をうなされていらっしやるの」

ボンヤリ目を開くと、異様に大きな恋人の顔が、私の鼻先に動いていた。

「夢を見た」

私は何気なく^{つぶや}呟いて、相手の顔を眺めた。

「まあ、びっしより、汗だわ。……………怖い夢だったの」

「怖い夢だった」

彼女の頬は、^{ほお}入日時の山脈の様に、くつきりと^{かげ}蔭と日向に別

れて、その分れ目を、^{しらか}白髪のような長いむく毛が、銀色に^{へりど}縁取って

いた。小鼻の脇に、^{きれいあぶら}綺麗な脂の玉が光って、それを吹き出した毛

穴共が、まるで^{ほらあな}洞穴の様に、いとも^{なまめか}艶しく息づいていた。そし

て、その彼女の頬は、何か巨大な天体でもある様に、^{じよじよ}徐々に

徐々に、私の眼界を覆いつくして行くのだった。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版1刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻 湖畔亭事件」春陽堂

1926（大正15）年9月

初出：「新青年」博文館

1926（大正15）年4月

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：門田裕志

2017年3月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火星の運河

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>